

「こころの健康を考える落語会」 多くの労働者を苦しめるパワハラとは

大阪体育大学・辰巳佳寿恵研究室と管理職ユニオン・関西の共催で5月31日、「こころからの健康を支える伝統文化」シリーズの第1回として、落語とフリートークを連携させた催し「こころの健康を考える落語会」を、浪商学園大阪体育大学アネックス(大阪市北区)で開催した。

日本の伝統文化の中に、私たちが豊かに生きるための知恵やヒントを見いだそうという企画で、企画された。

主催者の辰巳教授は、今回は落語家の桂福楽師匠を招き、古典落語「寝床」の鑑賞と、パワハラメントをテーマにした意見交換会が行なわれた。

同研究室では、病気や障がいによる単なる困難として捉えるのではなく、それらの経験から得られる学びや気づきにも目を向けている。今回の研究会も、伝統文化を入り口に現代社会の課題について考えようという試みとして企画された。



参加者の多くは落語を生で聞くのが初めてだったという。桂福楽師匠の熱演に圧倒されるとともに、落語ならではの人間描写や笑いに心を動かされた様子が見られた。

参加者の多くは落語を生で聞くのが初めてだったという。桂福楽師匠の熱演に圧倒されるとともに、落語ならではの人間描写や笑いに心を動かされた様子が見られた。

落語終了後には参加者全員によるフリートークが行なわれ、「パワハラについて」「パワハラへのさまざまな対応」をテーマに活発な意見交換が行なわれた。

参加者からは、「個人によるパワハラだけでなく、組織ぐるみで人員整理や排除を進めるようなケースもある。まずはどのようなハラスメントなのかを見極めることが大切だ」

桂福楽師匠プロフィール

1959年、東大阪市生まれ。小学生の頃から落語に興味をもち、中学校に入り友人と落語研究会を立ち上げる。1978年、大阪芸術大学に入学。1979年2回生の時に四代目・桂福団治に入門して「桂小福」となる。1999年、大阪文化祭賞奨励賞を受賞。2004年、「桂福楽」を襲名。



との指摘もあった。

さらに、「録音や記録を残す事、法律上の権利について知ることが重要だ。加害者は相手が法律

自らを責めないで ひかりえクリニック 有本進院長

この日コディネーターとして参加した「医療法人光愛会ひかりえクリニック」の有本進院長は、精神科医の立場からハラスメントとメンタルヘルスについて語った。

有本院長は、ハラスメントによって精神的不調に陥った人の多くが職場で孤立していると指摘。周囲も問題を認識しながら関わることを避けるため、被害者は孤立を深めてしまう。家庭でも十分に愚痴を言う相手もいない人も少なくないという。

「人間が集団で生きる以上、ハラスメントが全く存在しない社会をつくることは難しい」としながらも、有本院長は被害を受けた人への支援の重要性を強調した。特に、ハラ

はないかと分析した。「強い立場の人に迎合した方が生きやすいという考え方は、大人の社会だけでなく子どものいじめの構造にも見られる」と指摘した。その上で、ハラスメントへの対処として



フリートークでは様々な意見が出た。

最も大切なのは、まず相談相手や愚痴を言える相手を持つことだと強調した。問題がすぐに解決しなくても、自分の気持ちを受け止めてくれる存在が大きな支えになる。また、個人としてどのように意思表示や反論を行なうかを考えることも重要であり、その方法を一緒に模索することが支援者の役割だと語った。

落語という日本の伝統文化を通じて、現代社会が抱えるハラスメントの問題を考えた今回の研究会。笑いの中に描かれる人間関係の本質を見つめながら、心の健康を支えるために何が必要なのかを参加者一人ひとりが考える貴重な機会となった。

辰巳教授は第一回目の成果として以下のように語った。ハラスメントが起

落語「寝床」あらすじ

ある長屋の大家は、浄瑠璃(義太夫語り)が大好き。自分の芸を人に聞かせたがるが、そのひどさに誰も聞こうとしない。大屋が浄瑠璃の会を開いて、自分の浄瑠璃を聞かそうとしても、長屋の店子たちは、あれこれ理由をつけて欠席する次第。怒った大屋は、「会に来なければ店子には全員出て行ってもらう」と無茶な事を言い出す。困った店子と使用人たちはあれこれ相談し、義太夫を聞く事にするが……

社会資本政策研究会

関連団体を支援する会
K U

関西生コン関連
経営者会

悩み事相談、中小企業問題、労働問題など
ご連絡ください。秘密厳守いたします。

オールジャパン労働組合

電話(06) 六八〇九 六六三四

吉野建設株式会社